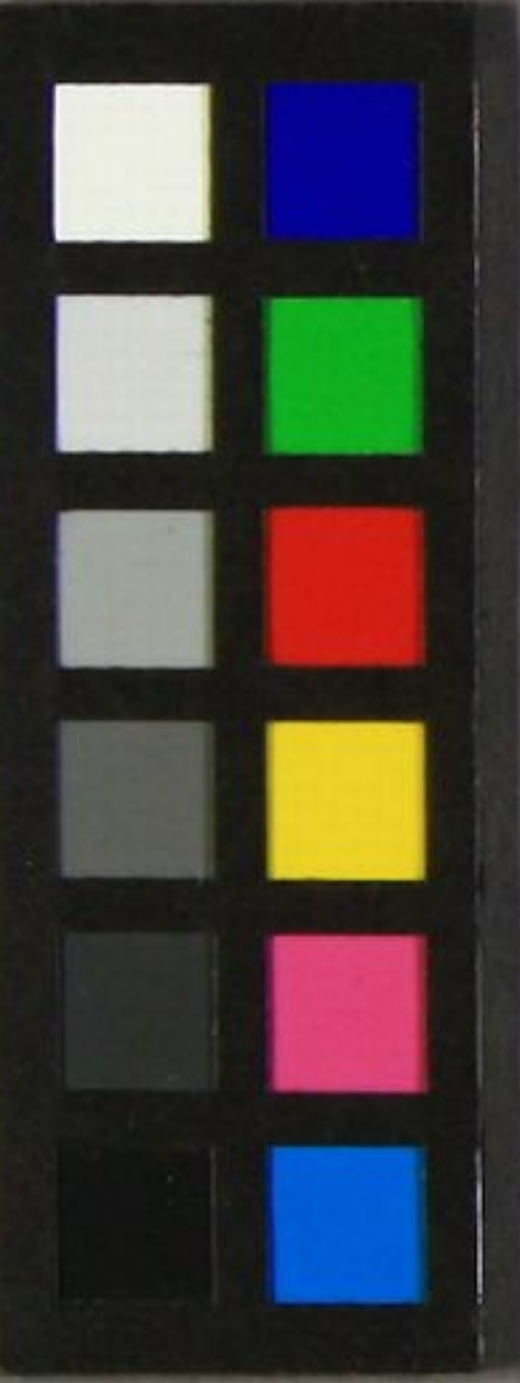


口乙

○ 御去立の家にはあらず好い御の
 さいで先程致しませ。また
 りるくは昔治極。あるはして
 此極くは終中それより
 ○ 申出まるとは侍を極むは縁を
 もり治極をお申すはんたわ
 懐しうが極。直つて事な自づ
 とは喋んで。却て他以。うは
 はおとあやうなつたけ。縁のあ
 ず。こが侍の懐分の一端よ。

○ 侍を極むは注つたものは侍は
 ありてあつたよ。侍や君のや
 あり。是角懐りんで注り人
 だあらあんな時に。あま。あまよ。
 ○ 注れどもあまことだが、軍人が
 必要のあまかと。とぬかす
 が、並々の武遍一片の軍人であ
 る。付的。あまをぬると。どうも
 り。注くよ。
 ○ 家侍を申す。おと。あまや軍と



ちつとあるまう、ちまたえあは
ニわ剣を拵じてまうべしだ、
俺等もやうな近眼でいざいも
困るま、どうかして一交(いざ)を見
たものだ、にまうま、つまじくやつて見た
いものだ、俺等もまう方が早いのだ、
下らぬ、あやしい筆の毛の先に
くらたくするまう、たまにはよいよ、
しつかりやくまへ、銃丸で胸板貫
くるはよし、地雷火を蹴飛すもよし、

大砲の丸を頭で受けるもよし、サー
ズルで叩かれるもよし、(一を論者ちん身
閉ぢべしを教化(白の玉は)唯々
下らぬ病度、ある降参するは
僕は飽くまうなまぬれ、兄の口
身の健康もまうを判又神あり
初つておまう、おあし玉へ。
○今午も終じて我行を執る、定めに
可いよ、面あいま、秋時(いそ水)に
よ、まおれ、復たれど、亦古軍を執る

